

## 韓国 済州島の柑橘類の予測に人工知能と3D技術を活用

[FreshPlaza 2025年8月22日](#)

済州農業研究普及局は、済州島産柑橘類の収穫量予測を改善するため、人工知能(AI)と3Dモデリングシステムを導入した。

韓国の主要輸出農産物の一つである済州島産ウンシュウミカンの収量予測は、これまで現地調査に依存していた。調査官は年に3回、320カ所のサンプル果樹園を訪問し、着花数を数え、果実の大きさと糖度を測定し、収量を推計していた。この方法は労働集約的であり、夏の高温期における人手不足が弱点であり、早期の収穫の影響も受けやすかった。

新システムは、過去10年分の現地調査記録と、韓国気象庁による微気候データ、さらに衛星及びドローンから得られた植生指数を統合する。研究者らは複数の機械学習モデルを用いて、花と葉の比率、着果数及び果実のサイズ、植栽密度、及び標高に基づき、収量を自動的に予測することが可能となった。8月の中間調査では、研究者達はスマートフォンで柑橘類の果樹を撮影し、システムの試験を実施した。アップロードされた画像から40分以内に果樹の3Dモデルが生成され、それによりAIが果実の個数と大きさを算出した。

農業デジタルセンターのキム・テウ所長は、「AIによる予測は労働集約度を軽減し、人的誤差を最小限に抑え、精度を向上させる。デジタル変革を通じて予測の信頼性を高めることで、済州島の柑橘類産業の競争力を強化することを目指している」と述べた。この取組みは、韓国が推進するより広範囲の農業デジタル化事業の一環であり、済州島の柑橘類部門は、サプライチェーン全体における不整合の削減と生産計画の改善を目的とした高度な予測技術の実証モデルとされている。

出典: The Korea Bizwire

## ベトナム 日本向けの果実・野菜の輸出が増加

[FreshPlaza 2025年8月25日](#)

ベトナムの日本向け果実・野菜輸出は、安全な製品や有機栽培品に対する需要の高まりに支えられ、拡大を続けている。在大阪ベトナム貿易事務所によれば、日本ではベトナムが強みを持つ熱帯果実と冷凍野菜の需要が高い。日本には63万4千人以上のベトナム人が居住及び留学しており、これは海外ベトナム人コミュニティ全体の約5分の1を占め、このグループもベトナム産青果物の需要に貢献している。

カシューナッツ、ドラゴンフルーツ、ココナッツ、生鮮ライチ及びドライフルーツは現在、イオン、ドンキホーテ、イトーヨーカドー等、日本の大手小売チェーンにおいて広く販売されている。2025年のライチシーズンには、約200トンの生ライチが日本に輸出され、スーパーやオンラインショップで流通した。2025年第1四半期には、日本のベトナム産果実市場は前年同期比で22.8%の増加を記録し、第4位の輸出市場となった。

輸出促進の取組みは、農業環境省(MoAE)及び産業貿易省によって調整されている。グエン・ホン・ディエン産業貿易大臣は、「輸出入支援のための貿易促進活動の強化及び多様化には、関連機関・組織との連携が不可欠である。これには主要市場における特定産業向けの大規模貿易プログラムが含まれる」と述べた。MoAEによれば、ベトナムは2025年の最初の7カ月間に215億ドル相当の果実及び野菜を輸出し、前年同期比で17%の増加となった。

アジアイングリディエンツグループ(AIG)は、果実・野菜加工品の品揃えを拡大するとともに、貿易促進及び世界的流通ネットワークとの連携を強化している。同社は「AIG製品は現在、50以上の国と地域で入手できる。長期的には、世界的競争力を持つコア製品の強化を図るとともに、有機原料分野の拡大、プレミアム農産加工品の開発、自社工場全体での技術応用の増加を推進する2本立ての戦略を追求する」としている。

出典: Vietnam Investment Review

(EUに関する記述を省略しました。翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。)